

## 日本の内と外

政策研究大学院大学教授

伊藤 隆

### はじめに

ご紹介にあずかりました伊藤でございます。きょうの講演を引き受けましたものの、一体なにをお話ししたら皆さんの役に立つかということ、たいへん悩みました。もう一つは、私はいま非常に忙しい状況でございます。たとえば数年前に完結しました『佐藤栄作日記』とか、現在進行中の鳩山日記とか、そういうものの編纂をやりましたし、いまいろいろやっているものですから、そういうものを種に何かお話しする準備をしたいと思っておりましたが、現在、文部科学省から多額の研究費をいただきまして、オーラルヒストリーということをやっております。これは、公的な仕事をなさった方々から、その仕事についてのお話を伺うというプログラムでありまして、現在、海部俊樹さんとか、外交官でありました柳谷謙介さんとか松永信雄さんとか、あるいは文部官僚でありました木田宏さんと天城勲さんとか、そういう方々からお話を次々と伺っております、それが十数人おりますので、その勉強、準備、そして、その後始末がありまして、ほとんど時間がありません。そのほかに四つか五つの資料の翻刻という作業を抱えておりまして、寝る間もないと言っていると大げさですが、そんな状態でありました。それで、阪本是丸さんに早く演題を出せと言

われて非常に困りました、うーんと言っていたら、阪本さんが助け船を出してくれまして、「この間あなたは『日本の内と外』という本を書いたじゃないですか。それをタイトルにしたらどうですか」と言うので、それはいいアイデアなどと思ひまして、早速それをいただいでしまったわけです。

その本というのは、中央公論新社の「日本の近代」というシリーズの最後の巻でありまして、『日本の内と外』というものです。これは最後の巻でありますので、日本の近現代全体をカバーするようなことを、ある側面から書いたわけです。昨年もかなり忙しかつたものですから、よく日曜大工と言いますが、土日だけ使って、毎週月曜日には編集者に数枚の原稿を渡すということが続けておりまして、やっと、今年の一月に出来上がったということです。

『日本の内と外』という本で私が行いましたのは、日本の近代・現代を二つの部分に区切りまして、前半は開国から始まりまして、明治維新が目的とした独立の保持、条約改正、列強と並ぶ地位の確立が一応達成された、第一次世界大戦に至るまでの時期、これが第一部であります。日本のこの間に行つた事業というのは、世界的に見てもきわめてまれな事態でありまして、欧米以外の地域で独立を保持すること自体が非常に困難だったわけですけども、独立を保持するだけではなくて、近代化、産業化、軍事大國化ということを達成することができたのは、日本だけと言つていいだろうと思ひます。それをいかにし遂げたかということが、前半の課題でした。

そこでとくに活躍した人々。その多くは幕末から明治初期に使節団の一員としてとか、あるいは留学というかたちで世界を見てきた、あるいはそこで勉強してきた人々。その人々が明治日本をつくつてきた人々だということでもあります。そこではトップリーダーというよりは、むしろ、それを支えた人々を多く取り上げました。たとえば高橋是清とか尾崎三良、金子堅太郎、末松謙澄、渋沢栄一という人々です。こういう人々が留学して戻つてきて、日本の近代化、産業化のために非常に大きな役割を果たしたのだということを強調したわけです。また、日本はそのために非常に高い給料を払つて、御雇外国人を雇つた。この人々がやはり非常に大きく貢献してくださつたということを描きま

した。

こういう人たち、つまり御雇外国人とか、日本に旅行に来た人々が、幕末、明治の日本をどう見ていたかということも、一つの大きなテーマでありました。たとえば日本を開国に導いたといいますが、脅かして日本を開国させたといえますか、ペリーであります。ペリーはごく狭い範囲の見聞でありましたけれども、膨大な報告書を書きました。その報告書の中で日本人の能力を非常に高く評価して、将来の産業上の競争者になる可能性があるということ指摘しております。多くの外国人たちも基本的には同じような評価をしていたように思います。ほかのアジアの諸国と違う存在として日本を見ていたと言えるように思うのです。

もう一つは、幕末までの日本の長期にわたる蓄積を新政府は非常にうまく受容した。それを土台に近代化を進めることができたと言ってもいいかもしれませんが、そのことを指摘いたしました。たとえば人材の面で申ししても、幕末に幕府から派遣された留学生たちは、かなり多く新政府に雇われます。戊辰戦争の最後の函館の戦争で戦った榎本武揚とか大島圭介、あるいは、あとで外務大臣になる林董<sup>はやしたなす</sup>という人たちはみんな朝敵でありましたけれども、ごく短い期間で赦免されて、やがて新政府の中の役割を与えられているわけです。そのことにも象徴されておりますが、たとえば岩倉使節団という大規模な使節団が明治政府によって派遣されます。その中の中核部分といえますか、実務部分といえますか、そういうところはほとんど幕末の留学生たち、これは幕府だけではありませんで、薩長はじめ、ほかの諸藩から留学していた人々が支えていたことにも見られるわけです。この内容は詳しくはお話しいたしません。そこでふれなかったことについて述べておきたいと思えます。

## 一、日本は主体的に文化を受容してきた

開国以来、広く知識を世界に求めという、例の五箇条の御誓文にあるとおり、明治維新というのは、日本が欧米的な国家に変貌するよという決意を明らかにしたものであります。しかし、幕府自体も欧米文明を受容する姿勢でありまして、かなり抵抗もありましたけれども、留学生を出したり、御雇外国人を雇ったりしているわけです。では、日本は欧米的な国家になったのかというと、ある面、たしかに欧米的な国家になりました。しかし、これはそれまで蓄積してきた日本文化というものが主体的に受容するということでありまして、それは五箇条の御誓文に出ているとおりであります。欧米文明に飲み込まれたわけではありません。

日本は非常に古い時代から漢民族の文化、大陸の文化を受け入れるということをいたしました。しかし、約二万年続いた縄文文化が日本人を形成してきたわけでありまして、その日本文化、縄文文化が大陸の文化を受容した。文化を受容するというのは、受容する主体がなければ、受容はできないわけであります。ご承知のように、漢民族というのは、現在の中華人民共和国の版図の中に、ごくわずかの人口を持っていたにすぎなかったわけですが、それが周辺の民族を次々に吸収していくとかたちで、漢民族が膨れ上がってきました。その吸収された民族は、その民族としてのアイデンティティーを失って、漢字を用い、漢民族の風習に飲み込まれるわけです。これは今日でもモンゴルとかチベットというところで漢民族化ということが進められています。

中国の王朝というのは必ずしも全部が漢民族の王朝であったわけではありませんし、むしろそうでないほうが多かったように思いますが、その周辺の朝貢国はその中国に服属して、同じ年号、同じ法律を用いるのを原則としていたわけです。しかし、日本はいつも朝貢したわけではなく、遣唐使の廃止以後は朝貢をほとんどしておりません。多く

の年月は朝貢していない。漢字という貴重な資源を導入しましたけれども、別に漢文で読み書きをしたわけではない。やがて、仮名として漢字を用いるという発明をします。その漢字を使って日本語を表記するということを発明したわけです。そういううえに『古事記』とか『万葉集』『源氏物語』など、高い水準をもった作品を生み出してきました。朝鮮半島とは違っていて、宦官の制度とか科擧の制度は受容しませんでした。ですから、選択的に受容していると言っているのだらうと思います。同じことは、欧米文明との接触においても行われたと考えていいのではないのでしょうか。どのようにして、どの程度の受容をするかということは、古代においても蘇我、物部の対立などに表れているように、明治期においても同じであります。中江兆民の『三酔人経綸問答』などにも表れてきますけれども、あいつは攘夷的だとか、あいつは西洋かぶれだといった対立がさまざまなかたちで政治的にも文化的にもありました。しかし、もちろんそれは固定的なものではありません。大勢として、欧米化は急速に進展して、今日の日本を形成するわけがあります。

しかし、われわれは受容したにもかかわらず、相変わらず日本人でありまして、われわれのもつ文化は総体的に日本文化と考えるわけです。今日グローバルイズムとかいろいろなことが言われて、地球市民だなどという馬鹿げたことを言う人間がおりますけれども、あくまでも日本人でありまして、その日本人という主体をもって国際化を進めていくのだということは、間違いないことだらうと思います。文化というのは非常に長い年月を経て達成されるものでありまして、その達成された文化を一朝一夕でなくすことはもちろんできません。なくしたら、これは民族としてのアイデンティティーを失うということがありますし、また、世界に貢献することもできないわけです。

『日本の内と外』という私の作品の後半は、第一次世界大戦の最中にロシア革命が起こる。以後、一九九〇年代の初頭に至るまで、日本も世界も共産主義というもののかかわりをもたざるをえない。これに反対するなり、賛成するなり、そういう立場に置かれたわけです。私は後半の部分で、日本および日本人と共産主義とのかかわりを中心に

書きました。コミンテルンの支部としての日本共産党の成立。それから、スターリン粛清と日本人共産主義者。それから、国家関係というのは日ソ関係。第二次世界大戦末期のどさくさ紛れの対日参戦。その結果、満州地区におけるソ連軍の暴虐、あるいは六十万を超えると言われる日本人のシベリア等への強制連行と強制労働。たくさん犠牲を出したわけです。それから、朝鮮戦争と日本共産党。その後の日本共産党。現在多少とまどっている日本共産党。そういうことを書きました。

昭和の初期と戦後初期に共産主義が非常に強い影響力をもった時期があります。戦後の熱病のような嵐の中に、私も短い期間でしたけれども、巻き込まれた経験をもっております。共産党というものを研究の対象にすることは、それを冒瀆するものだという感じが非常に強くありまして、日本共産党について研究することは一種のタブーであつたと言つていいだろうと思います。共産党の行つてゐる分析とか方針を絶対的に正しいというふうに前提したうえで、歴史や現状を分析すべきものだとしてされてゐたわけです。その日本共産党について立花隆という人物が『日本共産党の研究』という本を書きました。これはかなり評判になりました。私は非常に素晴らしい本だと思ひまして、当時、素晴らしい本だということを何かに書きました。それは日本共産党にとつて許しがたいことでありまして、もちろん、共産党は立花氏を徹底的に批判したわけですけれども、私も反動的歴史学者としてちよつと著名になりました。いまはそういうことはなくなつてきました。しかし、日本共産党を研究するというのは、日本の近代史の人々にとつてなるとなくうさんくさいことをやつてゐるというニュアンスがどうしてもあるのです。私もここでは日本共産党についてかなりはつきりしたことを書きました。

## 二、近現代史を分析する軸―アングロサクソン派とアンチ・アングロサクソン派―

日本の近代を考えると、いろいろな分析のための軸があるだろうと思います。いろいろな軸を考えて、その軸を組み合わせて日本の近現代を理解していくことが、歴史家の仕事だろう。そのなかで、日本の近代を考える場合に、大きくアングロサクソン派とアンチ・アングロサクソン派という軸がかなり有効なのではないかと私は思っております。これを共産主義との関係でふれておきたいと思います。

明治期から欧米派と大陸派という考え方ができるだろうと思いますが、西洋かぶれと、大陸派というのは、攘夷派とは違いますが、反近代派といえますか、そういう流れであります。福沢諭吉の有名な脱亜論というのがあります。この当時、脱亜の亜はたぶん、福沢の頭にあつたのは中国と韓国だろうと思います。福沢は韓国の政治家たちにいる援助をしております、かなり深く突っ込んでやっていたようであります。しかし、脱亜論を書いた段階では、それらの国々が日本とともに近代化の道を進まないなら、日本は彼らと一緒に歩むことをやめて、どんどん先に進んでいこうということを宣言したものと理解していいのではないかと思うのです。

もちろん、中国や韓国と提携していこうという考え方の人々、つまり大陸派の場合でも、旧体制をそのまま維持してやっつていこうというわけではないわけでありまして、やはり近代化をともに進める。そして、欧米と対抗していこうという発想であります。そういう流れはずっとありまして、たとえば明治日本をつくってきたトップリーダーの一人である山県有朋が、明治末年に「人種戦争論」というのを書いております。この「人種戦争論」は非常に興味深いものであります。日本は清国との間に深い信頼関係をつくっておかなければならないということが、一つのポイントであります。もう一つのポイントは、しかしながら、それを条約とか同盟というかたちで表に出すことは、絶対に避けなければならない。これは欧米の嫉妬、危機感をおおることになるからだと言っています。これは欧米諸国が黄禍論というものに非常に敏感になっていることを前提にして、そういう意見書を書いているわけです。

黄禍論については皆さんご承知だと思えますけれども、かなり古くから、イエローによってホワイトがつくつてき

た近代文明が攻撃されて、滅びる危険性がある、それを未然に防がなければならぬという考え方であります。日清戦争の時に三国干渉がありました、独仏露の三国で言われていたのはまさにそのことでありまして、日本の東アジアにおける強大化というのとはかく叩いておかなければならないということでありまして、

日露戦争が始まった時、伊藤とか山県とか松方とか井上といった元老たちは、日露戦争が白人対イエローの戦いになるというイメージでとらえられると、日本は孤立する危険性がある。そこで、日本は決してそういうたたかいはしていないのではないんだ、文明のためのたたかいはしているのだというアピールをしなければならぬ。そのために二人の人物を欧米に派遣いたします。金子堅太郎はハーバード大学の卒業生で、ルーズベルトとも知り合いですし、それから、末松謙澄は伊藤博文の娘婿であつて、長くイギリスに留学していました。ほかに高橋是清を外債の発行のために派遣します。そのほかに、日露戦争の場合には、明石元二郎という陸軍の武官に相当巨額の金を与えまして、ロシアの後方からの攪乱、つまり、ロシアにおける反皇帝派、社会主義グループの決起を促すという工作もやりました。日露戦争は戦場での戦いのほかに、そうした外交的な、あるいは情報的な戦争、トータルな戦争として戦われたわけです。その中心は黄禍論、イエローペリルを打破するというものでありまして、そのために金子堅太郎と末松謙澄が非常に大きな働きをします。ロシアの側は一生懸命それを使おうと思うのですが、なかなかそうはいかないという状況をつくりだしたわけです。

このイエローペリルという考え方は、太平洋戦争の時にアメリカが世論を喚起するためにだいたいお使いました。それから、だいぶ前になりますが、日本がジャパン・アズ・ナンバーワンなどと言われていい気になっているところに、ジャパン・バッシングということがありました。あのジャパン・バッシングの議論の中にもそういうニュアンスがありました。

大陸派の系統を引くアジア主義という言葉がありますが、アジア主義というものの考え方の流れが共産主義的な全



体主義と結びついて、国内のアンゲロアメリカ的自由主義を圧迫して圧倒していったというのが、昭和十年代ではなからうかと考えております。前者は、私の言う革新派であります。彼らがアンゲロアメリカ的資本主義に対抗してフアッシヨ的な、あるいは共產主義的な全体主義を主張して、昭和十年代を通じて政権の中樞に到達するという構図であります。

その外交的な表現が日独伊ソ四国同盟構想というものであります。日独伊三国同盟が締結されて、プラス、独ソ不可侵条約、それに日ソ中立条約ということで、この四国が連携をする。そうすると、残るのはアメリカ大陸だけだという考えであります。たしかに、短い期間ではありましたが、その四国の連携が出来上がって、アメリカが孤立するということになりました。しかし、ヒトラーがソ連を突然攻撃することによって、アメリカとソ連が連携するという可能性を生み出したわけです。第二次世界大戦が終わったあとで、この二つの巨人が激しい対立をする。いわゆる冷戦に至るわけですが、第二次世界大戦においては、一方の側、つまり日独伊と米ソの対立という図式でこの戦争が戦われます。その時にアメリカは民主主義ということを盛んに言ったわけですが、ソ連が民主主義であるという認識は非常に面白い認識だと思えます。第二次世界大戦を民主主義の勝利だと考えると、ソ連も民主主義だということになるわけです。それはあとですつかりひっくり返ることになります。

この戦争の終結の時期に、日本のリーダーたちが一体どうやって戦争を終結させるかということ考えたときに、ソ連に仲介を頼むという結論になるわけです。海軍の高木惣吉大佐が海軍側の随員として、近衛がソ連に派遣されるときについていくことになっていて、持っていく訓令案をつくっております。もちろん近衛の側もつくっています。そのいくつかの案文が残っております。これは去年だったと思えますが、『高木惣吉 日記と情報』という大きな史料集を私どもが作りました。その中で、スターリンが仲介者になってくれて、日本は名誉ある講和をしたいということが高木の考えであります。その代わり、もちろんソ連に対しては非常に大きな譲歩をする。権益を与える。樺

太を返すから始まって、満州における日本の權益を全部引き渡す等々でありまして、いちばん最初の段階の案を見ていますと、驚くべきことに、講和条約の成立とともに日本はソ連と攻守同盟を結ぶ。つまり、軍事同盟です。この対象はアメリカ、イギリスであります。そして、ソ連が南方に進出することを日本は援助するという条件もここに書かれております。

近衛というのは非常に難しいのでご説明が必要でありますけれども、近衛は私の言う革新派のシンボリックな存在として東亜新秩序、そして三国同盟、日ソ中立条約、開戦決定の寸前まで推し進めた人物でありましたが、いよいよ日米戦争という可能性が非常に高くなったときに、東條と対立して辞めざるをえないことになりました。そのあと、彼は急速にその考え方を変えております。一種の転向と言つていいだろうと思います。そこで、彼は昭和二十年の二月に昭和天皇に上奏するわけですが、その上奏のときに、自分は陸軍あるいはその他の共産主義者に誤られていたというところで、天皇にお詫びをしているわけです。近衛とか吉田茂らは一刻も早く英米の側の懐に飛び込もうということ、を盛んに主張したわけで、近衛の上奏文というのはまさにそういう内容であります。一刻も早くアメリカのもとに降伏しようということでもあります。

昭和十年代を通じていろいろなことがあります。先ほど申しましたような革新派が自由主義派を圧迫して、だんだん追い詰めていくという構図で考えることができます。では、自由主義派といえますか、そちらの側は将来的な見通しとして何を考えたかということですが、昭和の初年に大恐慌がありました。世界でいちばん先に駆け抜けたのが日本であります。日本は昭和〇年代（昭和）を通じてかなり高度成長をしております。ですから、ある程度のお年の方は思い当たると思いますが、昭和十五年ぐらゐまで日本はかなり豊かな国でありました。もちろん今と比較したら話になりませんが、当時としては非常に豊かな社会であったように思います。

そういう上り調子の日本の産業の一段の飛躍ということを考えて計画されたのが、東京オリンピック、万博であり

ます。この東京オリンピックや万博は、同時に別の側からは、その前のベルリン・オリンピックと同じように国威発揚というニュアンスで同調があったわけです。しかし、基本的に進めていた人々は、東京オリンピックをバネにして日本の経済、産業の飛躍的な発展のきっかけにしようと考えていたようであります。ところが、日中戦争が始まりまして、これが延期となってしまつて、その方向性が失われていくことになりません。

いわゆる革新派といわれる人々は英米的な資本主義を打倒することを目標にしていたわけでありまして、ラテン系のイタリア、ゲルマン系のドイツ、そしてスラブ系のロシア、そして中国を味方につけてという発想であります。これは完全にアンチ・アングロサクソンだと思います。ですから、その反対派のことを親英米派と言つたわけでは

### 三、日米安保派と反日米安保派

こういう流れが戦後においてもある程度連続しているのではないかというのが、私の感じであります。すこし飛躍ではありますが、日米安保派と反日米安保派という対立と考えてもいいように思います。前者は多数派の自民党に代表されて、後者は東側陣営の日本における代表といふべき日本社会党、日本共産党でありました。前者、つまり自民党、あるいは自民党に代表される人々はアメリカを中心とする自由世界の一員として日本は生きていくべきだといふ考えでありました。後者は非武装中立といふことを掲げながら、しかし、アメリカ帝国主義と対決する東側陣営にくみするといふ立場をとつたわけでは。こういう対立がいわゆる五十五年体制のもとでの対立であつたわけでは

ソ連が崩壊した。そうすると、東側陣営といふのはなくなるわけでは、どうなつたかといふわけですが、それは崩壊前からこうした図式がすこしずつ変化して、自民党の中にも中国や韓国との関係をより重視する勢力がだいに増えてきます。自民党の憲法改正再軍備といふ結党のときの綱領がすこし修正された。その綱領は曖昧なことに

なります。野党の中でも、たとえば社民党、あるいは公明党はちよつとウロウロとしますが、自由主義陣営の中に日本は進むべきだという考え方は、だいたいそこで一致しているのではないかと思います。ただ、政党横断的に現在、アングロアメリカ派とアンチ・アングロアメリカ派とが形成されているのではないかという感じを受けるわけです。教科書問題でも、靖国神社参拝問題でも、今度の同時多発テロ問題に対する対応にも、そういうことが見られるのではないかという感じがしております。社民党のある議員さんがホームページで「アメリカ、ざまあ見る」ということを書いたというのでちよつと問題になっておりますが、そういう反米感情が旧社会主義陣営を中心になんとなく浸透してきているという感じがします。

日米安保の問題はまたあとでふれますが、私は『日本の近代』の中で大東亜戦争についてはほとんどふれませんでした。ただ、第一部の終わりのほうで日露戦争後のアメリカの対日警戒心とオレンジ作戦計画ということにふれました。たしかに第一次世界大戦前後の日米関係は、一方で太平洋の覇権を巡って日米対立が、移民問題とか、建艦競争とか、それから、日米未来戦記の大量の出版、これは猪瀬直樹氏の『黒船の世紀』という非常に面白い本に記述されておりますが、そういうことに表れていると思います。

しかし、日本とアメリカが直接に相対立する利害関係をもっていたわけではありません。日本とアメリカとの貿易関係は大東亜戦争直前まで増大している。日本人のアメリカイメージも決して悪いものではなかった。やはり、富と自由の国として憧れさえあったと言っていると思います。問題はアメリカの中にも、日本がアジアでの覇権を狙う動きに対して非常に強い警戒心を抱くグループがあり、他方、日本で先に述べましたようなアンチ・アングロサクソンの動きがだんだん主流になってくる。それが四国同盟というかたちをとり、アメリカに孤立感を与えた。ですから、先ほど申しましたように、昭和十六年、独ソ開戦はアングロサクソン側にソ連との連携が政治力学的に生まれる誘因になったと言っていると思います。米ソ対日独伊という対立する構図が生じた。そのような世界的な

提携、対立関係の中で大東亜戦争、あるいは第二次世界大戦というものを見ていく必要はあるのではないかと思いません。

日本とアメリカとの二国間関係でものを考える風潮がありますが、私はそれでは大東亜戦争は理解できないのではないかと思うのです。では、日中戦争はどうか。これも私はこの本でほとんどふれませんでした。これも日露戦後の南満州での日本の権益の獲得とその防衛という問題から始まっております。中国の権益回収の動きに対して、日本陸軍が先制攻撃をかけた。そして、満州事変を起こしたことであります。『牧野伸顕日記』、これも私がかかわって出版をいたしました。『牧野伸顕日記』の中には、昭和の初期から見られる昭和天皇の非常に強い陸軍に対するご心配があると書かれております。それは、陸軍の行動が国際的な日本の立場に影響することに非常に危惧をもっておられたのだらうと思います。

ところが、満州事変が非常にスムーズに進んだわけです。その結果、どういうことが生じたかと言いますと、このことよってソ連が極東の軍備を増大させた。今度はこれがまた日本にとつての脅威になる。また、アメリカとの関係を悪化させるという結果をもたらしたわけです。これらのことからついに国際連盟脱退のやむなきに至ります。この間に中国は、これは偽文書だということははっきりしているわけですが、田中上奏文というものを信用する。この田中上奏文というのは、日本は中国を征服して、さらにそれを拡大して世界制服を方針としているというものであります。これは明らかに偽文書なのですが、いまの中国の歴史学者はみんなこれは本物だと言っております。非常に政治的な文書だと思えますが、中国共産党政権でもこれは真実の文書として受け取られていることに注目しなければなりません。ですから、これが日本が絶えずベコベコとお詫びをするものになる文書だと言っているのではないかと思えます。日中間の戦争は蒋介石政権を英米ソ連の側に押しやった。そして、二つの戦線の間で第二次世界大戦が戦われたのだと考えております。

前に申しましたように、第二次世界大戦の終了とともに米ソの対立が顕在化して、それが半世紀近く継続して、最終的に共産主義が破綻した。もつとも、東アジアでは共産主義はなお健在とも言えるわけです。中国、北朝鮮、ベトナムには共産政権が依然としてあります。しかし、一応、世界的には共産主義は破綻いたしました。その破綻の結果、どういうことになったかといいますと、民族、宗教戦争が続発した。その一つの表れとして、イスラム原理主義テログループのアメリカ攻撃になった。それに対してアメリカが今度はテログループを攻撃する。根絶させようというこ  
とであります。

## おわりに

私たち日本は、近代で非常に大きな偉業を達成したと私は思っております。先ほど申しましたように、欧米以外の国で唯一、列強化することができた。これは大変な努力だと思えます。そのことはまた世界の歴史を変える。つまり、世界の歴史というのは欧米列強の歴史であったわけですが、必ずしもそうではなくなってきた。それがやがて、第二次世界大戦の結果として植民地の廃絶というところにつながっていく。軍事的には非常に弱体化した日本であり、まずけれども、経済的にはなお世界第二の大国であります。サミットのメンバーを考えてください。日本以外にイエローの国はありません。G5から始まって、G8になっていますが、その間にイエローの国は一つも入っていないのであります。

しかし、先ほど申しましたように、東アジアにおける共産主義がなお健在、それが周辺国家であります。アメリカが領軍が与えた日本国憲法、それを補完する日米安保条約のもとでわれわれは生きております。日本国憲法は占領中にアメリカ軍がつくった。これは明白なことであります。それをそのままいまわれわれは引き継いでいるわけです。

だけど、これでは生きていけない。そのためにアメリカ軍に守ってもらわないとしょうがない。そこで、日米安保条約が結ばれる。だから、憲法と日米安保条約で日本はいま存立しているわけです。そういう条件のもとで、世界第二の経済大国になっている。この経済大国になることも、世界の歴史の中でこれだけの高度成長をやったところはあまり見当たらない。ジャパン・アズ・ナンバーワンなんて言われてうれしくなって、ちよっといい気になった。しかし、いま非常に具合が悪い。

たしかに、小沢一郎さんが言っているように、日本は普通の国ではありません。日本国憲法は普通の国の憲法ではない。そういういろいろな問題はあるのですが、日本は世界第二の経済大国という資産を持つている。それだけではなくて、高い教育を受けた人材をたくさん持つております。そのわが国が、前途は多難であろうとは思いますが、知恵と努力によってさらなる発展をしなければなりません。われわれはどうしてもそれをさせなければならぬと考えているわけです。非常に抽象的な話になって恐縮でありますけれども、そういうことをご勘弁を願いたいと思います。ありがとうございます。